

あの日 30 秒に何を思ったの?」 帰らぬ娘への母の問いかけ

9/9(土) 0:00 配信毎日新聞

次女の小林順子さんの眠る墓の前で「またすぐ来るからね」と伝える母の幸子さん。以前は週 1 回来ていた墓参りも、今は年 6 回程度に減った＝東京都文京区で 2023 年 8 月 26 日、岩崎歩撮影

画像 QR コード (添付)

長く急な石段の先に、娘の眠る墓がある。東京都葛飾区の小林幸子さん (77) は 8 月の炎天下、手すりを頼りに、動かしづらくなった足をゆっくりと運び、一段ずつ確かめるように上っていた。息を切らし、何度かつまずきそうになりながらたどり着くと、ようやく表情が和らいだ。「順子、来たよ」。墓石をぼんぼんと優しくたたき、じっと目をつむる。心に浮かぶ言葉は、27 年間ずっと同じだ。「あの 30 秒間、あなたはどんな思いだったの」。決して答えてはくれない。そう知りながら。

上智大 4 年だった次女の順子さん (当時 21 歳) は 1996 年 9 月 9 日、自宅で何者かに殺害、放火された。あの日、幸子さんは午後から勤務先の美容室に向かった。米国留学を 2 日後に控えた順子さんだけが自宅に残っていた。約 1 時間後、自宅から火の手が上がった。

慌てて帰ると、案内されたのは病院ではなく警察署だった。「どうして病院じゃないの? 順子はどこ?」。怖くて聞けずにいると、間もなくして夫賢二さん (77) から全てを知らされた。「順子がいないと生きていられない」と半狂乱で泣き崩れた。その後しばらくは、娘の後を追うことばかり考えていた。

幸子さんにとっては、大人になっても「甘えん坊な娘」だった順子さん。いつも幸子さんのそばに来ては、「髪をポニーテールに結って」「朝ご飯はなあに?」とせがんだり、問いかけたりした。

そんな娘が寂しがらないように、納骨までの 49 日間は毎朝、骨つぼを膝に乗せて抱きしめた。家族がまだ眠る中、2 人だけの静かな時間を過ごす、自身も「私たちはずっと一緒。だから大丈夫」と思えるようになってきた。

仏壇には毎朝晩、家族と同じ食事を供え、できるだけ明るい話題を投げかけるようにしてきた。旅行には順子さんの写真を持って行き、同じ景色を眺める。いつも一緒。そうすることで、奪われた順子さんと家族の人生をつないできた。

今も特定にすら至っていない犯人への憎しみは当然ある。「執念だよ。怨念（おんねん）だよ。恨み殺すんだよ」。仏前にそう語りかけた時期もあった。でも、いつしかそんな日々にはむなしさがこみ上げ、「まずは順子を安心して成仏させてあげたい」と考えるようになった。それ以来、怒りややり場のない悲しみは胸の中にしまうようになってきた。

ただ、どうしても涙がこらえきれない時がある。「襲われて 30 秒くらいの間に亡くなられたと思います」。事件発生直後、捜査員から伝えられたその一言を思い出す時だ。事件の光景や、息を引き取る間際の娘の気持ちを想像し、胸が張り裂けそうになる。

そんな時に墓に行くと、不思議と気持ちが穏やかになった。「あの時、あなたは何を思った？」。この 27 年間、心の中で何度も問いかけてきた。順子さんは答えを教えてくれない。でも、こうして墓前で問いかければ、甘えん坊だった我が子と心を通い合わせているような気持ちになれた。そんな時間が、幸子さんを支えてきた。

電車とバスを乗り継ぎ、自宅から約 1 時間。かつては毎週欠かさなかった墓参だが、コロナ禍や高齢が重なり、今は年 6 回程度に減った。「年を取って、体力も気力も確実に弱ってきていて……。事件の解決は、私たちがいなくなってからなのかな」。焦りの色がにじむ。

8 月下旬の墓参の時、帰り際に幸子さんは自分に言い聞かせるかのように語りかけた。「順子、またすぐ来るからね」。【岩崎歩】

届かなかったハガキ 上智大生殺人放火事件 未解決のまま 27 年

9/9(土) 11:00 配信

07NEWS

1996 年 9 月 9 日、東京・葛飾区の自宅で上智大学 4 年の小林順子さん（当時 21 歳）が殺害され、自宅を放火された。

事件は未解決のままきょうで 27 年になる。

「順子じゃない、と。違う違うって思っていました。」当時をこう振り返った順子さんの大学時代の親友が順子さんに送るはずだった一通のハガキの存在を話してくれた。

■たまたまの隣の席がきっかけで

[順子さんからのハガキ 旅先などでハガキを送り合った](#)

順子さんとの出会いは、上智大学の推薦入試での面接会場の待合室。

「隣に座ってたのがたまたま順子で、後ろの席の子も交えてなんとなく話が始まって。『緊張するね』とか言って、話しやすい子だなんて」

3人はお互いに名前も聞かず会場をあとにしたが、その後、一般入試の会場で再会。実は、3人とも推薦入試で落ちてしまい再挑戦をしていたのだ。「今度こそは！」と誓った3人は見事合格、入学式で2回目の再会を果たし大学生活をともに過ごす親友となった。

入学当初から"世界で活躍するジャーナリストになる"ことが夢だった順子さん。

「大学入ったときから思い描いていたと思います。授業の選択の仕方が将来に結びつくような選び方で。ほかの学科の授業もちゃんと自分で見て選んでいたり、第二外国語も『中国語必要になると思うから』って、大学では当時マイナーだった中国語を選択したり」

また、旅行に行った時などには互いによくハガキを送り合っていたという。丁寧に書かれた文字には順子さんの几帳面な性格が表れ、文章の中には英語がよく使われていた。しっかり者だった順子さん、親友たちに意外な一面を見せることもあったという。

「サークルの活動で新潟県に行き、旅館に泊まったとき、実は順子は怖がりです。私もそうなんですけど順子1人でトイレに行けなくて2人で連れ立って行ってました。待っている間にいなくなれるのが嫌で、待っている方が歌を歌い待っていないといけなかった」「かと思えば、旅行でドライブをしていると、突然、『順子のレディオクラブ』って言って、オリジナルのラジオ番組始めて。『リスナーの方とお電話つながってます』って言って友達に話振ったり大声で歌を歌ったり、おもしろい子でした」

充実した大学生活を送りながら着実に夢へと近づいていた順子さん。アメリカ留学を2日後に控えた日に、事件は起きた。

■「今生の別れじゃないんだから」と思っていたのに...

留学を控えていた順子さんは、それまでに会える友達には会おうと自ら友だちに声をかけていたという。

「『送別会を自分で開きます！』って自分で飲み会開いていて。私はそんな今生の別れじゃないんだからと思ったんですけど...」

8月に開かれた飲み会には順子さんを含め、仲の良い友人4人が集まり、たわいもない会話をした。その帰り道、JR御茶ノ水駅で乗り換えだったため電車を降りた順子さんに、「アメリカ遊びに行くからね」と手を振った。これが順子さんとの最後の会話となってしまった。

「気を付けてねって。次の春休みに遊びに行くつもりだったので、普通のなんでもない友だち同士の会話をしてまさかでしたね...」

■届けられなかった 1 通のハガキ

事件の一報を受けたのは、夏休みでバリ島へ旅行をしているときだった。宿泊先に連絡があり、すぐに友人たちに確認した。

「順子らしき人が火事にあってけがをしたってやんわり聞いて。しかもなぜそう伝わってきたのかはわからないけど、葛飾区じゃなくて"台東区的小林順子さん"みたいな感じで最初聞いたので、いやそれは順子じゃないでしょって。違う違う違うって思いながら」

ほかの友人との連絡で真相を知った。

このとき旅行先で見つけた 1 枚のハガキがあった。順子さんと最後に会った日に「バリ島から送るね」と話し、順子さんの留学先の寮の住所に送る約束をしていたハガキ。

「バリ島に着いて、そこでみたプルメリアの花がすごくかわいくて。順子に見せてあげたいなと思って、その花の写真のハガキを買いました。あとは書いて送るだけだったんですけど...」

そのハガキを持って翌日には旅行を切り上げて飛行機に飛び乗った。機内で事件についての記事を読んだが、すぐに信じることはできず、帰国し、もう一人の親友に会ったときにも「これはウソだから」と言うほど、受け入れるには時間がかかった。

■誰かは犯人のことを必ず知っている...声をあげてほしい

そして、事件から 27 年。

「私の中で順子ってなんとなく歳をとっている。もし変わらず 21 歳のままだったら、自分の歳と比較してもうこんなに経ったのかって思うんですけど。何となく一緒に歳をとっていてあまり差を感じない。それを思うと長くもないのかなって」

ふとしたときによく順子さんのことを思い出し、心の中で同い年の順子さんに話しかけるときがある。

「仕事でイラっとしたり、どうにもうまくいかないときとかに順子に相談したらどういう言葉かけてくれるかなとか。好きな音楽とかあったら順子もこれ好きかなとか、ぼんやり思い出すんですね」

いまだ捕まらない犯人に対して思うことは。

「私にとって犯人は、"大切な親友を奪った卑劣な男"っていうだけで、許せないことには変わりはない。今思うのは、きっとその犯人の周りに何かを知っている人が 1 人はいると思っていて、その人たちに声をあげてほしいなって。その人にとったら犯人は大切な存在かもしれないけど、その人が知っていて、(順子さんの) お父さんとお母さんが知らない状況があるのは違うでしょって」

複雑な心境を明かしてくれた。

■警視庁「27年の壁を打ち破って必ず捕まえる」

[情報提供を求める警視庁作成のポスター](#)

警視庁によると、8月末時点でこれまでに延べ11万人を超える捜査員が、事件の捜査に関わっている。警視庁の捜査幹部は、「無念を晴らすため27年の壁を打ち破って必ず犯人を捕まえる」と改めて決意を新たにしている。また、捜査員は「必ず検挙すべく今も捜査につとめているので、どのような情報でも提供してほしい」と呼びかけている。

情報提供先 警視庁・亀有警察署特別捜査本部:03-3607-0110

留学の2日前、妹は殺された 娘が継いだその夢 上智大生殺害 27年

9/9(土) 7:00 配信

朝日新聞 DIGITAL

[事件の3カ月前、家族4人で箱根旅行に行った際の小林順子さん\(左\)と亜希子さん。両親が撮った写真が焼けずに残っていた=1996年6月、熊田亜希子さん提供](#)

昨年2月、成田空港はコロナ禍で閑散としていた。岐阜市の熊田亜希子さん(52)は国際線搭乗口で、1年間の米国留学に旅立つ長女の香那子さん(23)を見送った。

[【写真】事件の5年ほど前に妹の順子さんが買ってくれたピアスを手にする熊田亜希子さん。お気に入り、事件当日も身につけていた。ほぼ唯一の形見となった=2023年8月28日午後4時45分、岐阜市、遠藤美波撮影](#)

一度も振り返らず、保安検査場を進んでいく背中が頼もしかった。一緒に見送った父の小林賢二さん(77)、母の幸子さん(77)は笑顔だった。「少しは親孝行できたのかな」と思った。

27年前にあの事件が起こらなければ、同じように米国留学に発つ21歳の妹を見送るはずだった。

1995年冬、3歳年下の妹、順子の留学が決まった。上智大学で英語を専攻する順子は、しっかり者で曲がったことが大嫌い。けんかもしたが、努力で留学の夢をかなえた妹を誇らしく思っていた。

出国は翌96年9月11日に決まった。

■事件2日前、妹と一緒に買った花柄のワンピース

その4日前、順子に誘われ、東京・四谷で2人でランチをした。自分の婚約者のこと、順子の彼氏のこと。店で色々話し、銀座に買い物に行った。順子に勧められ、薄ピンク色の花柄のワンピースを買った。

出国3日前の夜には、小さい頃よく行った近所の銭湯に2人で出かけ、両親と4人で暮らしていた自宅に帰った。翌朝の出勤時は、順子の顔は見ないまま出かけた。

その日の夕方。「お宅が火事になっています」。看護助手として勤めていた病院で電話を受けた。急いで戻ると、自宅の周りには人垣ができていた。近所の人の家で、母は泣いてうずくまっていた。

「順子は？」。近所の人に聞くと、「病院に運ばれた」。やけどでもしたかなと思いながら、母と亀有署に向かった。

■机に「凶器」「刃物」 単なる火事ではなかった

色々な刑事から同じことを聞かれた。刑事が机に置いた紙に目がいった。「凶器」「刃物」。初めて、単なる火事でなく、順子は殺されたのかもしれないと思った。

遺体安置所で順子と対面した。きれいな顔だった。現実感がなかった。

あの日、銀座で選んでくれたワンピースは焼けてしまった。同じ店で似たワンピースを買って棺に入れた。

泣き崩れる母を支えないと。そう思い、お通夜以降、母の前では泣かなかった。

1 カ月後に仕事に復帰した。目指していた介護福祉士の資格も取った。そんな毎日の中、仕事帰りに順子のお墓参りに行き、心の中で話しかけて一人で泣いた。

婚約していた男性と結婚し、2 年後に長男、4 年後に長女が生まれた。長女の右脇腹には順子と同じあざがあった。「生まれ変わりかも」と思った。

順子に似て、長女は正義感が強い子に育った。幼い頃から「順子叔母さんは英語が得意だったんだよ」と伝えた。長女は留学制度のある大学に進学した。

■昨年末、娘から届いた写真

米国留学中の長女から昨年末、順子が行くはずだったシアトル大学の写真が送られてきた。留学先は別の町だったが、訪ねてくれたらしい。うれしかった。

長女は昨年末に帰国し、春から外資系の IT 企業で働く。帰国後、「昔から『私も留学に行かないといけないのかな』とってた」と話していた。順子と重ねられ、期待されていると感じてくれていたのだろう。米国で成長して帰ってきた娘を誇らしく、いとおしく思った。

犯人が捕まらないまま事件から 27 年が経つ。一步ずつ前に進んではきたが、やはり時間は止まったままだ。「順子ともっと色んな話をすればよかった、思い出を作っておけばよかったという後悔は、事件が解決しない限りずっと残ると思う」（遠藤美波）



〈上智大生殺害事件〉1996 年 9 月 9 日夕、東京都葛飾区柴又 3 丁目の住宅で、この家に住む上智大 4 年の小林順子さん（当時 21）が首を刃物で刺されて殺害され、自宅が放火された。容疑者は特定されていない。

現場に血痕があり、A 型の男性の DNA 型が検出された。犯人が小林さんを殺害した際にけがをした可能性があるという。事件前に複数の住民が、黄土色のコートを着た身長約 150 ～160 センチの男を家の前などで目撃していた。

小林さんの父、賢二さんら殺人事件被害者の遺族でつくる「宙（そら）の会」が時効撤廃を求めて活動。事件当時、15 年だった殺人事件の公訴時効は 2010 年の法改正で撤廃された。現在も捜査が続いている。情報は亀有署（03・3607・0110）へ。

朝日新聞社

“上智大生殺害”未解決のまま 27年 「無念晴らすことが最大の供養」父親ら情報提供呼びかけ

9/15(金) 13:52 配信

07NEWS

<https://news.yahoo.co.jp/articles/f8e2fa64b565fe623d9bd4fca1055a21b610cdd1>

上智大生殺害事件から 27年 未解決のまま 遺族が献花

9/15(金) 12:27 配信

FNNプライムオンライン

<https://news.yahoo.co.jp/articles/5587a468a16670493b12dd0fe2b1f68b2c4920da>

「上智大生放火殺人事件」から未解決のまま 27年 関係者による献花式 父・小林賢二さんらが柴又駅前情報提供を呼びかけ

9/15(金) 14:54 配信

TBS NEWS DIG ↓

<https://news.yahoo.co.jp/articles/eb44f4d24f1ce757204de79ecb159e8faaad9e6b>

あれから 27 年

(柴又女子大生放火殺人事件)

順子は、被害に遭わなければ 48 歳

生きていれば、夢だった報道人になっていただろうか？

子供は、順子と同じ米国留学の道を歩んでいただろうか？

その米国では、**犯行現場に残された DNA から似顔絵を作成して、**
犯人逮捕という報道が続いています。

立場を替えれば、順子はその取材に関わっていたかも知れない。

だとしたら！

- 「日本の DNA 捜査が遅れているのは何故なの？」
- 「なぜ法制化による捜査活用に至らないのか？」
- 「加害者の人権を考慮して、究極の個人情報を尊重するならば、被害者の命の尊厳はどこに？」

順子記者は、報道人として追及取材に奔走していただろうか？！

DNA 活用で似顔絵等できるなら、**活用できる法制化を図り、捜査**
の進展を期待します。

長期未解決の中で、**現場に残された犯人の DNA が、唯一解決への道筋**と考えております。ご支援・ご協力お願い致します。



2023 年 9 月 15 日 殺人事件被害者遺族の会：宙の会

